

執筆者略歴

岡田 美保（おかだ みほ）

防衛大学校総合教育学群教授

防衛大学校総合安全保障研究科後期課程修了、博士（安全保障学）。

研究業績に「日ソ国交回復交渉の再検討―ヤルタ合意と二つの対日交渉方針―」（博士学位論文、二〇二一年）など。

鈴木 祥（すずき しょう）

外交史料館非常勤職員（『日本外交文書』編纂室）、中央大学文学部兼任講師

中央大学大学院文学研究科日本史学専攻博士課程後期課程修了、博士（史学）。

研究業績に『明治日本と海外渡航』（日本評論社、二〇二二年）など。

岩間 有希奈（いわま ゆきな）

外交史料館非常勤職員（アジア歴史資料センター協力室）

東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士後期課程在籍。学会報告に「第一次世界大戦後ドイツにおける女性医師と国際女性医師協会」（ジェンダー史学会第二〇二一年次大会における報告）。ヴァイマル期ドイツの女性医師と青少年福祉に関する研究を行っている。

（略歴は刊行時。）

編集後記

今号では、二〇二四年一月八日に岡田美保教授をお招きして開催した研究会の記事を掲載しました。東アジアにおける「戦後」と「冷戦」の境目がどこにあり、ソ連はこの変化をいつどのように認識したかとの問題意識から、関連するロシア（ソ連）側の史料をご紹介します。だきつつ、当該期における東アジア情勢の変化に応じた外交・軍事面でのソ連の政策転換を論じていただきました。

また、二〇二四年四月に麻布台ヒルズ・森JPタワーに開室した外交史料館新展示室の概要を掲載しました。計画が立ち上がってから開室にこぎ着けるまでには多くの検討調整事項がありました。開室に至ったことにつき、改めて関係各位のご尽力に敬意を払うとともに、ご支援いただいた方々に感謝申し上げます。館長の巻頭言にも述べたとおり、新たな環境において積極的な展示広報活動を進めてまいります。

展示の記事も二点掲載しました。ひとつは新展示室での最初の特別展示である「日英通商航海条約」原本の展示、もうひとつは小村寿太郎記念館との連携展示です。いずれも準備期間の少ないなかで調整と準備が行われたもので、盛況となったことはひとえに関係者の熱意と賜物です。

鈴木職員の論文は、一八九六年から一九〇一年における米国の排日問題をめぐる日本政府の対応を外務省記録によって明らかにしています。日本政府は排日運動の激化を懸念し、一九〇〇年に対米移民を停止する一方、同年にサンフランシスコやコロラド州で実施された日本人に対する差別的なペスト検疫について、一年半にわたり連邦政府へ抗議しました。英語論文を本『館報』に掲載するのは久しぶりのことで、今後も意欲的な取り組みが期待されます。

岩間職員は、外交史料館所蔵の日独医事協定締結の経緯を示す史料について紹介しました。当時の医学雑誌の投稿記事などを参照しつつ、同協定の政治的背景や外務省における協定の位置付けなどから協定締結経緯を考察しており、当時の日独文化協力における医学関係者というアクターの存在を示唆しています。

続いて、二〇二三年度から二〇二四年度にかけて刊行した『日本外交文書 平和条約締結に伴う賠償交渉』上・下冊の概要を掲載しました。同巻は一九五二年のサンフランシスコ平和条約締結に伴うビルマ、インドネシア、フィリピン、ベトナム各国との賠償交渉等に関する主要な関係文書を選定して、「平和条約締結に伴う賠償交渉」として特集方式の上下二分冊で編纂・刊行したものです。

以上、『外交史料館報』第三八号の概要をご紹介しました。本号刊行にあたり御協力いただいた各位に御礼申し上げます。

〈掲載論文などの論旨は、執筆者個人の見解であって、外務省の公式見解ではありません。〉

外交史料館報 第三八号

令和七年三月二日

編集発行 外務省外交史料館

東京都港区麻布台一―五―三

電話 〇三―三五八五―四五一―

印刷 株式会社ハップ

東京都江戸川区松江一―十一―三